

月刊

いじろのとも

第十二卷

一月号

軽石も光る

軽石は
いかに磨けど
光らない
でもひたすらに
磨いたら
仏の光
うけて輝く

自己表現ばかり

自己表現したが
り分かって欲し
がるでも
他者理解には無
関心分かるう
とはしない

人生を考え直して

みたい人は（八四）

『正法眼蔵』解説（二八）

有時の巻を続けます。

薬山弘道（やくさんこうどう）大師、ちなみに無
際（むさい）大師の指示によりて、江西大寂（かう
ぜいだいじやく）禅師に参問す、「三乘十二分教、
某甲（それがし）ほぼその宗旨をあきらむ。如何是
祖師西来意（如何なるか是れ、祖師西来意）」。か
くのごとくとふに、大寂禅師いはく、「有時教伊揚
眉瞬目、有時不教伊揚眉瞬目、有時教伊揚眉瞬目者
是、有時教伊揚眉瞬目者不是（有時は伊（かれ）を
して揚眉瞬目せしむ、有時は伊をして揚眉瞬目せし
めず、有時は伊をして揚眉瞬目せしむる者、是、有
時は伊をして揚眉瞬目せしむる者、不是）」。

薬山ききて大悟し、大寂にまうす、「某甲かつて
石頭（せきとう）にありし、蚊子（ぶんす）の鉄牛
にのぼれるがごとし」。

例のように、参考までに玉城康四郎著『現代語訳正法
眼蔵1』（大蔵出版刊）の現代語訳を引用させて頂きま
す。

薬山弘道大師（七五一〜八三四）。石頭希遷（七〇
〇〜七九〇）の法嗣は、あるとき無際大師（石頭
希遷。青原行思の法嗣）のさしずによって、江西大
寂禅師（七〇九〜七八八。馬祖道一のこと。南嶽懷
讓（六七七〜七四四）の法嗣）に参禅した。

薬山「わたしは、三乘・十二分教についておおよ
そ、その趣旨を明らかにすることができましたが、
達磨大師が中国に來られた仏法の大意はどういうこ
とでしょうか」。

大寂「あるときは、彼をして眉を揚げ目を瞬（ま
ばた）かしめる。あるときは、彼をして眉を揚げ目
を瞬かしめない。あるときは、彼をして眉を揚げ目
を瞬かしめるのはよい。あるときは、彼をして眉を
揚げ目を瞬かしめるのはよくない」。

薬山「これを聞いて大悟し、大寂禅師に申した。
薬山「わたしはかつて石頭無際大師の所におりま
したときは、蚊が鉄牛にとまっているような思いで
した」。

この部分は、大して難解な言葉を使っている訳ではな

いのですが、少なくとも中国で栄え、日本に伝わった禅宗のことが分かっていないと、理解しがたいと思います。それは、まずは、「揚眉瞬目（ようびしゅんもく）」眉を揚げ目を瞬かしめる」という言葉です。

この言葉は、「偽経」という中国で作られたお経である「大梵天王問仏決疑経」に出てくる「拈華微笑（ねんげみしょう）」と呼ばれる、有名な伝説的故事から来ています。その伝説ですが、ある時、釈尊が靈鷲山（りょうじゆせん）で一本の花を手にとって示したところ、みんな何のことが分からず黙っていました。摩訶迦葉（まかかしよう）という弟子だけがその意味を理解して「こりほほえみました。そのため、釈尊は迦葉に法を伝えた、ということなのです。道元が、留学した当時（南宋時代）の中国禅宗では、「不立文字（ぶりゆうもんじ）」・教外別伝（きょうがいべつでん）が、「直指人心（じきしにんしん）」・見性成仏（けんしょうじょうぶつ）」の二句とともに、禅宗の立宗の基盤を示すものとして重用され、この「拈華微笑」の故事が、いわゆる、「公案」の一つとなっていたのです。

ところで、「不立文字・教外別伝」の意味ですが、禅宗では、経論の文字をはなれて、ひたすら坐禅によって釈尊のさとりに直入するのであって、教説とは別に、まさ

に坐禅という体験によって伝えるものこそが、禅の真髄であるということなのです。実は、ここで解説してきた道元の言葉（文字）『正法眼蔵』も、この意味で言えば、どうでもよいものということになります。ここに禅宗の一つの大きな矛盾が存在すると言えます。文字はどうでもよいと言いながら、それを説く矛盾です。

ついでに、「直指人心・見性成仏」ですが、禅宗の重要な概念を成していますので、説明しておきたいと思えます。これは、禅では、前述のように、文字や教説によらないで、直接、人の心をとらえ、自己の仏性を覚悟することによって成仏する、とするものです。

さて、これだけの前提となる知識をもって頂いて、次に進みたいと思います。

難しい言葉として、「三乗十二分教」があります。三乗とは、文字通り三種の乗物です。乗物とは、衆生を悟りに導いていく教えのことで、声聞乗（しょうもんじょう）、縁覚乗（又は独覚乗）、菩薩乗（又は仏乗）の三つがあります。この三つの教えは、衆生の素質に応じるもので、前の二つが小乗と呼ばれ、最後が大乗と呼ばれます。声聞は、四諦の教えを聞くことにより、縁覚は、十二因縁を観ずることにより、菩薩は六波羅蜜を修行することにより、それぞれ悟りに達するとされています。

なお、四諦とは、もう何度も述べましたが、四つの真理のことで、迷いの生存は苦であるという真理が「苦諦」、欲望の尽きないことが苦を生起させているという真理が「集諦」、欲望のなくなつた状態が苦を滅する理想の境地であるという真理が「滅諦」、苦滅に至るためには八つの正しい修行方法（八正道）によらなければならぬという真理が「道諦」である、とされています。また、ここで出てきました、八正道や、縁覚の教えに出てきました十二因縁につきましては、何度も述べましたので、ここでは省略させて頂きます。

次に、十二分教ですが、これは十二部教ともいわれ、仏の教えを内容や形式によって十二種に分けたものです。ですから、本文に出てきました「三乘十二分教、某甲（それがし）ほぼその宗旨をあきらむ」とは、薬山大師が「仏教の教えの本質をおおむね理解しました」と、自信のほど示したということです。

ところが、「達磨大師がインドから中国に來られた意味（祖師西來意）は、何なのでしょうか」と大寂大師に問いかけます。

それに対して、大寂大師は次のように答えています。「有時は伊（かれ）をして揚眉瞬目せしむ、有時は伊をして揚眉瞬目せしめず、有時は伊をして揚眉瞬目せしむ

る者（は）、是、有時は伊をして揚眉瞬目せしむる者（は）、不是」と。

「揚眉瞬目」につきましては、既に説明いたしました。難しい言葉は、もうありません。でも、この文章は理解しがたいと思います。なぜなら、前二つと後二つは、それぞれ互いに肯定と否定で、逆のことをいつているからです。文章として不完全で、意味をなしていません。

なのに、これを聞いて薬山大師は大悟したとあります。なぜなのでしょう。なかなか意味深長です。どの解説書もそのところを書いていません。触れているものはありますが、矛盾とは受け取っていないのです。

この矛盾を理解するためのヒントは、次の「某甲（それがし）、かつて石頭（せきとう）にありし、蚊子（ぶんす）の鉄牛にのぼれるがごとし」という部分にあります。私の理解ですが、おそらく石頭大師は鉄の牛にたとえられますように、否定と肯定で言いますと、厳しく、常に肯定の世界のみを示していたのだと思います。つまり、常に解脱の完璧な世界のみを示していたので、薬山大師にとって、自分のような蚊には、どこにも取りつく島がなかったということだと思ふのです。

それに対して、大寂大師は、既に見ましたように、肯定の世界も否定の世界も、共に肯定しているのです。ど

ちらも矛盾的に併存させているのです。つまり、蚊のよ
うな存在も肯定している、ということなのです。

十一卷（平成十二年）九月号と十一月号で、有時とい
う時間には、覚者の時間と凡夫の時間の両方があること
を指摘しました。ご面倒でしょうが、お持ちでしたら、
ご確認いただけたらと思います。

ですから、「有時は伊（かれ）をして揚眉瞬目せし
む」という覚者の時間もあれば、「有時は伊をして揚眉
瞬目せしめず」という凡夫の時間もあり、また、「有時
は伊をして揚眉瞬目せしむる者（は）、是」という覚者
の時間もあり、「有時は伊をして揚眉瞬目せしむる者
（は）、不是」という凡夫の時間もあるのです。

この肯定も否定も、共に肯定されるという絶対肯定の
世界が真の解脱の境地なのです。このことを伝えるため
に達磨大師はインドから中国に來たのです。

そのことが、この問答から分かって、薬山は大悟した
のだと思うのです。でも、一つ大切なことがあります。
それは、薬山大師がしていたように、釈尊のような覚者
の教えをひたすら学び、信じ、守り、則って生きている
とき、絶対に肯定される世界が開けてくるのです。その
ことを抜きにして、大悟はありません。いつ死んでも満
足であるという真の安心はやってこないのです。

自作詩短歌等選

アイデンティティー喪失

いま日本人が
アイデンティティーを
失っている

アイデンティティーは
自己を定位するもの
それは他己

アイデンティティーを
失うということは
他己を失うということ

それは
信仰を失うということ
生きる根拠が
無くなるということ

民主主義が進むと

民主主義が進むと
個人主義は
孤人主義に
個性は

孤性に
自立は
孤立になる

子どものころは

子どもらの
あたまとからだ
早熟す
なのにこころは
ますますすさむ

高校生の携帯は無駄

六割の
高校生が
携帯を
もっているとは
無駄の無駄なり

耐える力の衰退

三割は
いつもイライラ
小中学生
耐える力の
衰えと知れ
人として
耐える力の
根源は
人を信じる
ところにこそある

悪を正せ学校よ

学校も
少しは規律
示すべし
悪を正すは
教育の基

多数が免罪符

民主主義では
多数決が免罪符
神の許しではなく
相対な数の多少で
すべての悪が許される

煩惱即菩提が分かる

煩惱即菩提は
論理では
分からないこと
形式論理は
言うまでもなく
弁証法でも
捉えられない

それは
修行・精進という
体験によってのみ
真に理解できるもの

糖尿病の乞食

乞食さえ
糖尿病になる時代
消費が伸びない
飽食暖衣の日本

無宗教日本人の一末路

「ひきこもり」が
そのまま
英語になったという
日本にしかない
現象だから
それは
世界で
宗教を
失ってしまったのは
日本人だけということ

少年凶悪事件には前兆

警察庁が

最近起こった

少年凶悪事件二二件を

調べたところ

何らかの

前兆があるものが

大半だったという

でも

その前兆に

どう対処すべきかは

みんな対症療法に

すぎないものばかり

凶悪な犯罪は

こころの歪みが

引き起こすもの

当然

何らかの行動への

表出がある

問題は

個々の行動に

対処することではない

こころの歪みを

どう矯正するかだ

それは

自己と他己を育て

両者のバランスを

正すということ

日本の学者

自らは

なまけていながら

学者らは

ひとのはげみを

うらやみねたむ

自作随筆選

米大統領選の波紋

米国の大統領選挙の結果が、やっと確定しました。得票数ではゴア氏が多かったようですが、選挙人の数でブッシュ氏が上回ったということのようです。でも、最後の最後まで、フロリダ州の開票をめぐる、両氏の間で争いが行われ、結果の確定が長引きました。とても、不明瞭なものを感じていました。

穴をあける投票方法に問題があり、機械では読み取り不能のものが多数でた、と報道されていましたので、私は、人の手で確認するのが公正だと思っていました。アメリカ人は、裁判で争うことが公正だという意識があるようで、どこまでも、裁判が決定的役割を果たしました。そのことに驚きを禁じえませんでした。何かしら、アメリカ民主主義の行く末を見る思いを持っていました。

そうした時、毎日新聞の「世界の目」というコラムに、米国ラドクリフ大学の政治学の教授であるモナ・ハリントンという女性の方が「米国民主義の空洞化」と題して記事を寄せていました。

その中に、今度のことで「憂慮するのは、ゴア副大統領の当選がほぼ間違いなかったのに、共和党がブッシュ氏を勝たせようと、露骨に策をろうしたことだ」とありました。驚きです。

これに続いて次のような記述がありました。少し長くなりますが、引用させて頂きます。「フロリダ州の再集計が大統領選の決め手となって以降、フロリダ州政府は選挙を監督する立場を利用して再集計作業を混乱させ、無視しようと努めた。さらに連邦最高裁の保守多数派がかつてないほど政党政治に偏った論法で再集計の中止を決めた。／ひとことでいえば、共和党は、フロリダ州でどちらの候補が多数票を取ったかを隠し、それを知りたいと願った有権者の要求を妨害した。最初から最後まで弁解できないほど反民主主義的な行為というほかない」。この記事が真実だとしますと、世界で最も民主主義の進んだ国だと言われ、自らも自負するアメリカで、こんなことが行われるのかと、目を疑いたくなります。何度も書いて来ましたが、民主主義では、全ての価値が相対化し、一人でも多い支持を得れば、その価値が絶対化されます。それが、たとえ間違っている、悪であるとしてもです。ということは、相対な価値を絶対化する手続きが、投票という制度と言えます。もっと言いますと、

その結果、力の優勢を占めて勝つものが、絶対な価値を専有するということになるのです。

ですから、そのためなら、あらゆる手段をつくし、どんなことをしても、たとえ今回の米国大統領選でブッシュ陣営が行ったような卑劣なことをしても、得票を増やすこと、あるいは有利な結果を確定することが、至上命令となります。なぜなら、勝てば、全てを正当化できるからです。勝ったほうの論理が全てに優先するのです。

そこには、謙譲の美德といったものは存在しません。あるいは、お互いに許し合うといったことは、ありません。どこまでも、戦いなのです。そして、その決着は一応の正義が保障される裁判という「裁きの場」に移されます。しかし、裁判も民主主義制度の下では、相対的であることを免れません。最終的な裁判官の判断は、彼らの「心証」によっているからです。つまり、裁判官が「そう思う」ことが、真理なのです。裁判官が、絶対な聖者の教えに則っているわけではないのです。

そこでは、どこまでも、その裁判官の背負った「業」のままに、つまり執らわれを背負ったまま、判断するのです。この場合にも、引用文にありますように「連邦最高裁の保守多数派がかつてないほど政党政治に偏った論法」によって判断したのです。

積尊のことば（九七）

法句経解説

第三章 象

（三二〇）戦場の象が、射られた矢にあたっても堪え忍ぶように、われはひとのそしりを忍ぼう。多くの人は実に性質（たち）が悪いからである。

よく訓練された象は、矢に当たっても堪え忍んで勇敢に人の言うとおりに戦うのでしょうか。私たちも、そのように人のそしりの矢に堪え忍ばなければならない、と言っています。その理由は、多くの人は性質が悪く、当然のように人をそしるから、という訳です。このことは、マスコミを賑わす芸能人たちのバトルを見れば、誰でも、容易に理解できるのではないのでしょうか。それを、また、マスコミは商売のネタにしているのですが。

本誌でも、はじめのころ「凡聖逆謗」のことを何度か書いたと思いますが、世に有名な物書きのような坊主すらが、積尊を誹謗しているのに驚いたことがあります。坊主すら性質がわるいのですから、いわんや俗人おやです。

私の住んでいるところでも、寄れば人の悪口を言って

いる人が結構目につきます。多くの人は、人からそしられていることが耳に入りますと、動揺し、そのことを多くの人に口走ります。そして、その人を逆にそしります。そうなりますと、多くの人は性質が悪いので、面白がつて、最初にそしった人のところへ行つて、そのことを伝えます。こうして、二人の仲はどんどんと悪くなつていきます。

私は、関西に長いこと住んでいましたが、関西では、一度もそうした経験をしたことがないように思います。都会ということなのでしょう。

このことは、いま私の勤務している大学とかつて勤務した大学との比較でも言えます。

いま、私は自分なりのペースで論文を書いています。他の人と較べますと、少し早いようです。そうしますと、相対的に他の人は、私と較べて、論文の数が少なくなるということになります。それは、人々の腹立ちをうみ、いろいろのそしりを引き出すようです。

でも、私は、全く気にしていません。そんなことが耳に入っても、全く動揺しません。傲慢のように聞こえるかもしれませんが、人がそしろうが、認めようが、それで私の生き方や論文を書くペースや論文の内容が乱されることは、まったくありません。実は、学生でさえ私の

論文にけちをつけ、そしる者がいます。多分、自分の執らわれに触れるところがあるのでしよう。業の深さに哀れさえおぼえます。

(三二一) 馴らされた象は、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものもなる。世のそしりを忍び、自らをおさめた者は、人々の中にあつても最上の者である。

前の偈と同様に象をたとえにしています。象は危険な戦場に連れていかれたり、人を載せる乗り物として使われたりしますが、じつと堪えています。そのように、人間も、世のそしりを忍ばなければならない。それは、実は、自らをおさめるということで、それこそが、とても価値のあることだということ。そうすることで、人々の中で最上の者になれるということです。

ところで、「自らをおさめる」とは、どういうことでしょうか。それは、いま、まったく省みられなくなっている「自己を制する」ということです。いまは、自己を制するのではなく、他者を制することが最も大切なこととされています。

つまり、人からそしられて黙っているような者は、ダ

メな人間で、それに対して敢然と立ち向かい、相手をやっつけることが、より重要な価値となっているように思えます。

(三二二) 馴らされた駿馬は良い。インダス河のほとりの血統よき馬も良い。クンジャラという名の大きな象も良い。しかし自己をととのえた人はそれらよりもすぐれている。

(三二三) 何となれば、これらの乗物によつて未到の地(ニルヴァーナ)に行くことはできない。そこへは、憤みある人が、おのれ自らをよくととのえておもむく。

どんなによく訓練された動物の乗り物も、それに乗ってニルヴァーナ(解脱の境地・涅槃寂靜)に行くことはできない。そこへは、憤みがあり、おのれ自身をよくととのえた人だけが、おもむくことができる、ということです。

私は、この偈を読んで感動しました。いまだと、どんなに早いロケットやスペースシャトル、あるいは、どんなによくできた自動車や新幹線でも、それに乗ってニルヴァーナに到ることはできない、ということになるのだ

と思います。

もつといいますと、どんなに自分の欲望を満たそうとも、たとえば、どんなに名利（名誉や利益）を得ても、決して絶対な安心に到ることはないということなのです。

では、どうすればそこに到れるのかということですが、偈にありますように、欲望を追求するのではなく、逆に、自らを慎み、自分を制するものだけが、そこに到れるのです。

真言密教には、「戒・定・慧・解脱・解脱知見」ということばがあります。

「戒」は戒律を守ることです。戒律とは、たとえば、壇家も守るべきものとして五戒があります。それは、何度も述べますように、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒、です。あるいは、在家勤行式にもありますように十善戒があります。それは、五戒と前の四つまではおなじで、次の十個になります。不殺生、

不偷盜、 不邪淫、 不妄語、 不綺語、 不惡口、
不兩語、 不慳貪、 不瞋恚、 不邪見、 です。

こうした戒律を守って身を清らかに保ち、その上で、「定」に励むのです。定とは、冥想です。たとえば、坐禅であったり、ヨーガであったり、読経であったり、唱題・称名などであったりするわけです。

こうした修行にひたすら精進し、励むとき、「慧」である智慧が得られるのです。そして、やがて「解脱」に到り、その解脱によってもたらされる「解脱知見」を具体的な生活状況に応じて得ることが出来るのです。

現代では、坊主すらが、こうした戒律を守っていません。夜な夜な外国高級車に乗って色街に繰り出し、豪遊を重ねているものすらいます。それも、お金が自由になる経済的に豊かな（位の高い）坊主がです。

まして、在家の一般人に至っては全くといっていいほど、こうした戒律が大切だという人はいないと思います。

みんな自己の「利益と選好」を極大化するように、奮戦しています。パチンコ、マージャン、競輪、競馬、競艇などの賭け事や、ゴルフ、魚釣りなど金のかかるスポーツへの熱狂やサッカーや野球などのサポーターとしての観戦、グルメやセックスを追求しての海外を含む旅行など、その享樂ぶりは、世界のひんしゆくをかうほどです。身を清らかに保つなど、夢のまた夢です。

私は、多くの人が、質素儉約、専心勤勞、他心感応、聖道修証、を生活信条にしたらいと思っています。

この偈は、こうした信条や戒律を守って、自己を制することの貴さをうたっています。現代ほど、この偈が生かされなければならない時代はないように思います。

後記

一、明けまして、おめでとうございます。読者の方で、早々に年賀状を下さった方に、お礼申し上げます。失礼ですが、こちらからは、どなた様にも賀状を差し上げることが控えています。申し訳ありません。

二、温かい冬だと思っていましたら、北の国では、大雪が降ったようです。温暖化しないで、四国でも、もう少し雪が降ればいいのに、と祈らずにはおれません。

三、先日、ある読者の方から年賀の挨拶を兼ねて、お葉書を頂きました。その方は、もう透析を二十七年間も受けてこられた方なのですが、昨年は、心臓も悪くなり、このままだと余命一年と言われ、一端は悲嘆にくれられたそうです。でも、この『こころのとも』と旧友の励ましが支えとなつて、手術を受けられ、成功し、回復も早かったとのこと。本誌をこころの支えとして下さる方が、一人でもあることを、とてもうれしく思いました。

四、教育改革国民会議の報告書が公表されました。インターネットで、見る事ができます。また、コピーも取れます。それを読んでみましたが、単なる思いつきの羅列にしか過ぎません。どこにも一貫した哲学や理念のよくなものはありません。誰にも、先が見えていないようです。これでは、教育はますます悪化すると思えます。

五、依然として、常識では考えられないような、あるいは、世界に類を見ないような、凶悪な青少年の犯罪が、頻発しています。このような傾向には、今後一層拍車がかかるのではないかと、懸念されます。

六、この根本原因は、人々が互いに信じ合うことができなくなつて来たからです。それは、日本人が世界に先駆けて、信仰を失ってしまったということです。信仰をどう取り戻すか、それがいま日本人にもっとも問われていることなのです。でも、そんなことをいう人に、不幸にして出会いません。「日本は天皇を中心とした神の国」と言つた人以外には、ですが。

月刊 こころのとも 第十二巻 一月号 (通巻 一三三三号)	平成十三年一月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

